

平成30年度第1回四日市市総合教育会議

平成30年7月24日

午後 1時 開会

1 開会

○館政策推進部長 それでは、おそろいいただきましたので、始めさせていただきます。

今日は、平成30年度では第1回目の総合教育会議ということでございます。どうぞよろしくお願いをいたします。

司会は、政策推進部長の私がさせていただきます。どうぞよろしくお願いをいたします。

事項書にございますように、今日は、アクションプランの総括と今後の展開、新教育プログラム、教員するなら四日市プロジェクトについてという大きく3つございますので、よろしくお願いをいたします。

それから、この会議でございますが、公開となっております。傍聴や記者による取材等がありますが、今はなしですね。今日はゼロですね。珍しい、初めてかもしれない、ゼロということでございます。後で入ってこられるかもしれません。

2 四日市市学力向上アクションプランの総括と今後の展開について

3 四日市市新教育プログラムについて

○館政策推進部長 それでは、早速でございます。事項書に基づきまして議題に移っていききたいと思います。

まず、2番の四日市の学力向上アクションプランの総括と今後の展開ということですが、これにつきましては、3番の四日市市新教育プログラムと双方が相互に関係しておりますので、一括して進めていきたいなというふうに思っております。

このアクションプランでございますが、ご承知のように、平成27年度に策定しました教育大綱、この理念に基づきまして、それを実行するためにアクションプランを策定して、おおむね5年間の期間において、実効性のある取り組みを行うための計画ということになっております。

それから一方で、昨年度から議題にしております新教育プログラムについて、これも議論を深めつつあるわけでございます。

本日は、アクションプランのこれまでの総括と今後の展開について、新教育プログラム

との関係性も含めて、皆様にご議論をいただきたいと思っております。

さらに、新教育プログラムの策定につきましても、引き続き具体的に議論を深めていただきたいと思っております。

それでは、2番と3番にかかわる配付資料を、事務局よりご説明をお願いいたします。

○廣瀬教育監 教育監の廣瀬でございます。

まず、A3判の四日市市学力向上アクションプランの総括と今後の展開をお願いいたします。

先ほど館部長からお話ございましたとおり、平成27年度に策定した教育大綱の理念を着実に実現するために優先的に取り組むべき内容について、学力向上アクションプランを策定してまいりました。

位置づけはその図のとおりですが、2番にございますとおり、社会人になっても通用する問題解決能力を育むため、2つのアクション、学びの質の向上と学びの環境の充実を大きなベースとしまして、具体的な6つのアクションに基づく取り組みを進めてきたところでございます。

これについては毎年進捗を報告するというので、先にA4判の学力向上アクションプラン進捗管理というところの冊子をお願いいたします。

表紙にございますとおり、プランの実施に当たっては、第3次学校教育ビジョンの基本目標1、確かな学力の定着における成果指標に基づいた評価を行っていくというところですので、1ページあけていただくと、基本目標1、確かな学力についての3つの指標、①基礎的・基本的な知識及び技能、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考・判断・表現力、③学ぶことと社会とのつながりを意識しながら主体的に学習に取り組む意欲と態度、この3つについて、1番については、全国学力・学習状況調査の結果、全国の平均を100としたときの達成度、それから、2番については、学力調査の児童生徒の質問肢の中から、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」という肯定的な回答の割合、3については、同じく学力調査の質問肢の中の、「授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」という肯定的な回答の割合を指標としてございます。

下に評価を書いてございますが、①の基本的・基礎的な知識及び技能については、平成29年度は、表を見ていただくとおわかりのとおり、小中学校ともに100以上となりまして、前年度よりも向上してございます。これについては、全市的な学力向上の4つの取

り組みとともに、各学校において結果分析に基づく授業改善が進められたことが要因であると考えております。

②の思考力・判断力の向上のところについても、児童生徒のアンケートの結果を見ると、現状値より29年度は上昇しております。目標値がかなり高く設定してございますので実現は難しいんですが、目標に向かってこれまで以上に学級やグループで話し合う活動などを充実させることで、自分の考えを深めたり、意見を広げるという取り組みを大切に進めていきたいと。何より子どもたちが話し合い活動の有用性を感じるような授業づくりを進めていきたいと考えてございます。

3つ目の主体的に学習に取り組む意欲と態度でございますが、こちら表をごらんいただくと、子どもの回答については上昇しておるところでございますが、目標95%、85%にはまだ届かないところがございますので、日々の学びが教室にとどまることなく実社会とのつながりを意識できるよう授業改善を進めていきたいと考えております。

2ページ、3ページをお願いいたします。

上の枠囲みの総括については、後ほどまたご説明をいたしますので、先に下の主な成果と課題についてお願いいたします。

上の2つは、確かな学力定着のための授業改革の中の取り組みでございます。1つは、リーフレット「教員用 授業づくり ヒント&ポイント」を年3回発行して、すぐれた指導方法の共有を図り、授業力の向上に努めていきたいという思いで発行してきました。

それから、2つ目、問題解決能力向上のための授業づくりガイドブックを活用した授業が進められております。今後もこの取り組みを進めて、一人一人の思考力や表現力を確実に向上させる取り組みを進めていきたいと考えています。

3つ目の丸は、思考力・判断力・表現力を高める言語活動の充実と、アクション2のところでございますが、「中学生スピーチコンテスト THE BENRON」、29年度、第2回目の開催をしてまいりました。中学校全体の言語活動の向上が見てとれるようなすばらしい発表が展開されると思っております。日ごろの言語活動の取り組みの成果ではないかと思っております。

一番下の丸は、アクション3の四日市の地域資源の教育への活用というところで、博物館、四日市公害と環境未来館と連携し、地域を学ぶ取り組みが進んだ。これにつきましては、全小学校の5年生、全中学校の3年生が博物館や四日市公害と環境未来館を訪問する、こういった取り組みを進めることで、本市の地域資源や公害対策モデル都市としての歩み

を学習活動に生かして、持続可能な社会のつくり手の育成に役立てていると考えてございます。

こういった主な成果がございます。

3ページについては、学びの環境の充実の主な成果と課題のところをまずご紹介いたします。

一番上のところは、アクション4の空調設備整備による良好な学習環境の充実、これにつきましては、32年度の供用の開始に向けたスケジュール、確定してございます。手続を進めていただいているところです。

2つ目の丸につきましては、ICT活用による学びの環境の革新、アクション5のところですが、教員が授業でICTを活用する割合が97%となりました。こちらについては、今後、プログラミング教育という新たな課題もございますが、ICT環境の整備も進めるとともに、指導力の向上にも努めてまいりたいと考えております。

最後ですが、アクション6は英語教育環境の充実というところで、小学校英語専科教員の配置による効果、検証が進みました。昨年度、小学校英語実践推進校12校を指定して、英語専科を配置いたしました。この成果が確認されましたので、本年度、30年度は全小学校に英語専科教員を配置し、さらなる指導体制の確立や活用の工夫など進めてまいっておるところでございます。

最後は、CAN-DOリストによる授業改善、英検IBAの実施。これについては、中学校で生徒が英語を用いて何ができるようになるかを示したCAN-DOリストを策定して、それに基づいて授業を進めておるところでございます。

また、英検IBAは3年生で実施をさせていただいたところ、IBAの2技能、読むと聞くについて、英検3級レベル以上、それ以上が58.2%であるということが確かめられましたので、こういったデータをもとにさらなる授業改善を進めていくところでございます。

こういう結果、進捗を報告させていただくとともに、もう一度3番に戻っていただきまして、総括と今後の展開について、ご説明をさせていただきます。

アクション、学びの質の向上の分野については、このプランに位置づけた取り組みを進めてきたことによって、子どもたちが主体的に学習に向き合う場面が増えてきた。このことによって、全国学力・学習調査における学力の数値が上昇してきております。また、問題解決能力の養成や言語活動の充実、それから、本市の強みである算数、数学の力をさら

に伸ばしていく、新たな課題であるプログラミング教育、英語教育の充実、それから、走・跳・投など基本的な運動能力が少し弱いという本市の体力の課題など、そういった課題を見据えた対応が必要となっております。

今後の展開といたしましては、アクションプランの学びの質の向上の部分については、今からご説明させていただく新たに策定する新教育プログラムの中に盛り込んで、その内容の充実を図って、引き続き学びの質の向上に取り組んでまいりたいと考えております。

もう一つのアクション、学びの環境の充実につきましては、このプランに位置づけました空調については32年度供用開始に向けたスケジュールが確定していることや、ICT機器の導入及び更新については推進計画等で進めていただいておりますところ、それから、英語教育においてはYEFの増員やら英語専科の配置等、人員配置がある程度進められていることから、それぞれ所期の目的が達成しつつあるのかなと言えると考えてございます。

今後の展開については、アクションプランにおけるこの分野、学びの環境の充実についての進捗管理は今回で終了いたしまして、次期総合計画の中、また、推進計画に位置づけの中で着実な取り組みを進めてまいりたいと考えてございます。

今後は、整備された学習環境を活用して、夏休みの学習支援であったり、ICTを活用した効果的な授業による学習の定着、そういったところで学びの質の向上や学びの量の確保につなげてまいりたいと考えております。

そういったところから、下の表にございますとおり、6つのアクションについては、質の部分は新教育プログラムに移行していく、そして、環境の充実は推進計画等の位置づけの中で着実に進めてまいりたいと考えております。

別冊の四日市市新教育プログラム（案）の策定に向けてという3番をよろしく願いいたします。

趣旨については、先ほどのご説明のとおりでございます。

2番のプログラムの構成につきましては、本市の子どもたちの現状と課題の整理、それから新たな教育課題への改善、対応、新しい学習指導要領の改訂に向けた対応であったり、第3次教育振興基本計画への対応であるわけですが、そういったところを、優先的に取り組むべき柱を立てまして、特に就学前から小学校、中学校の期間において目指すべき子どもの姿を捉えて、プログラムとして系統的に組み立てることによって、教育効果をより高めていきたいと考えておるところでございます。

一番下の表の右側の四角枠ですが、新教育プログラム（案）と青で囲んでございますが、

1つ目は、読む・話す・伝えるプログラム、こちらについては、国語科を中心として読解力の視点を活用。しっかりとまずは教科書が読める。それから、新聞や広報のリーフレットやそういった資料、そういったものがきちんと読み取れる。社会で生きて働く力を育成したい。こういったことを軸に、読む・話す・伝えるプログラムを系統性を持たせてつくっていききたいと考えてございます。

2つ目は、算数、数学の力をさらに伸ばす。それから、プログラミング教育に対応するために論理的な思考で道筋をくっきりさせるプログラム、論理的思考力を育むプログラムを策定したい。

それから、3つ目は、英語でございます。就学前から英語と出会い、なれ親しむ、発達段階に応じたコミュニケーション能力を育成するプログラムをつくっていききたいと考えてございます。

4番目は、体力向上の部分ですが、先ほどの課題の中で、走・跳・投、走る、跳ぶ、投げるといった運動の基本について弱いところがございますので、これらをカバーできる十分な授業、運動量の確保のための授業改善を進めることを主に取り組んでいきたいと考えてございます。

5つ目、夢と志、これについては、第3次教育振興基本計画のところにもこういった言葉が出てまいります。子どもたちが夢や志の実現に向けて学び続けるための主体的な学習意欲と社会的自立に向けた資質、能力を身につけるためのプログラムを策定していきたい。

6つ目は、アクションプランにもございました四日市ならではの地域資源活用のプログラムを立てまして、四日市に誇りと愛着を持って、社会の一翼を担う人材の育成に努めてまいりたいと考えてございます。

1枚めくっていただくと、これは仮置きですけれども、案でございますが、四日市市新教育プログラムとして6つの柱を立てて、就学前から中学校まで1つの柱の中で、軸の中で、発達段階に応じて取り組みを進めていこうというものでございます。

一番左の読む・話す・伝えるプログラムについては、四日市独自の読解力の視点から、読解力の向上に向けて1つのプログラムを立てていきたいというふうに考えてございます。

論理的な思考のプログラムについては、特に小学校の3、4、5年生あたりの算数が少し弱いところの課題もございますので、こういうところに家庭教育支援の教材配信ができるようなツール、こういったものも考えていきたいと思っています。

英語については、現在も就学前からYEFがレクチャーブックスで幼稚園、今年から保

育園も一緒に聞いていただけるということになりましたので、就学前から発達段階に応じた使える英語の取り組みを系統性を持ってつくっていきたい。

4番の走・跳・投、体力の向上については、幼児運動調査というものがあまして、走・跳・投、例えば幼稚園やったら、25メートル走とか立ち幅跳びとかテニスボール投げ、こういったものを遊びの中でやっていただく、中心的にやって取り組んでいただくことで、こういった3つを意識したものを幼小中と系統立てていくことで運動能力の向上を期待したいと考えています。

夢と志のキャリア教育については、四日市版キャリアパスポートというものを策定しまして、それぞれその時期に、例えば小学校で給食の役割分担をどうしてきたかとか、宿題をどうしてきたか、そういったことを記録していくことで自分の成長を確認していく、そして、将来の進路に結びつけたりする。そういった社会的自立とか職業的な自立に向けて、自分の振り返りができるような、そんなツールをつくっていきたいと考えています。

6番の四日市ならではの地域資源活用のプログラムは、四日市公害と環境未来館の見学や自然教室はこれまでどおり実施をするとともに、真ん中の段にあるとおり、四日市調べてみたいマップであるとか、調べ学習お役立ちリンク集等を活用して、地元四日市の産業、環境、文化、こういったことが学べるようなツールを整理して、学校の学習に活用したい。

こういったものを考えておりますので、今後、具体的な取り組みについてはもう一度整理をして、作り込んでいきたいと思っております。本日は案としてご紹介だけさせていただきました。

以上でございます。

○館政策推進部長 どうもありがとうございました。アクションプランの総合的な総括、評価とともに、それをどのように新教育プログラムにつなげていくか。今日は、質の向上の部分了新教育プログラムへつなげていくと。

さらに、新教育プログラムについては、新たに拡充や新規の部分も含めて6つの柱を置いて、その6つの柱ごとに若干の例示も含めて、事務局から提案をさせていただいたという状況でございます。

それでは、この大きな枠組み、流れとともに、場合によっては最後の新教育プログラムの中の具体的なところのご提案もあってもいいと思っておりますけれども、何かアクションプランの総括から新教育プログラムのところにかけてご意見がありましたら頂戴して、次回につなげていきたいと思っておりますので、忌憚のないご意見を頂戴したいと思います。

いかがでございましょうか。

まず、大きな流れとしてのご確認ですけれども、アクションプランを一応総括した上で、質の部分を教育プログラムへ持って行って、どちらかというと環境面は、これは行政の計画に落とし込んでいく。この流れについては、皆さん、もうご了解いただけるということでもよろしいでしょうか。

そうしたら、こういう大きな流れ、組み立てはご了解いただいた上で、新教育プログラムにつなげていくところで、あるいは、場合によっては、ハードの部分も総合計画でこれから議論していきますので、ハードの部分についても何か、今後、足らんとところがあるよということであれば、そこも含めても結構だと思んですが、より具体的などころでいろいろご意見を頂戴できればなと思いますが、どうでしょう。

○加藤教育委員 アクションプランの評価を見せていただいて、総括があったとおりでして、成果と課題を、これをばねにして、新しいプログラムへ移っていくという流れとしては、私はタイムリーといたしますか、的を射ているなということで、新しい市長さんが誕生して、次のステップへ向かうというところへ来てますので、タイムリーでほんとうにいいのではないかと思います。

さらに、新しいプログラムにつきましては、いわゆる学力向上については、さらに3本の柱で継続してやっていくと。それに加えて、体力、それとキャリア教育、それと四日市ならではの資源活用、この3つが付加されて、6本柱で進むと。これは次の時代に向けて、骨太の方針をこの場でつくっていきそうだなということで、ほんとうに私も喜んでいるところです。

だから、ちょっと先走りますけど、新しいプログラムについて、子どもたちにつけたい具体的な知識、技能というのが当然出てまいりますので、幼稚園の時代に、小学校の低学年のうちに、あるいは高学年に、中学校でということで、いよいよ事務局でこれを具体化するためのスキルというのかな、そんなものをきちっと示して、指導いただく現場の先生方に、ここを幼稚園では押さえてくださいと、低学年ではここですよというキーとなるスキルがきちっと身につくような、いわゆるこのプログラムを補完するような、勝手に名前をつけるスキル集のようなものを、押さえておきたい具体的細案みたいなものですか、そんなものをぜひぜひ専門の部署で作成いただいて、着実にこのプログラムが実現するための方策が今後は必要やと。今日はまだそこまで議論はいきませんが、プログラムで、これでおしまいじゃなしに、ここからがいよいよ本番になってくると。

続いて、もう一個あります。今日の大きな柱の次の柱である、教員の現場の状況の改善という部分もありますけど、そのあたりをどうセットしながら、新しいプログラムの着実な実現というのを進めていきたいと思っておりますし、いくべきだと思っています。

そういう意味で、総括から、ここでは昇華という言葉を使ってもらってありますが、うまくつなげてもらっているのではないかなというふうに私は思います。

以上です。

○館政策推進部長 ありがとうございます。

これについて、事務局、何かありますでしょうか。このプログラムの案の、加藤委員がおっしゃるのは、幼稚園から中学校まで流れがありますけど、これを是とした上でということですね。

○加藤教育委員 これをいわゆる具体化するためのもう少し、現場でここというのが要るんだと思いますね。

○館政策推進部長 方策ですね。

○葛西教育長 その点で、例えば、読む・話す・伝えるプログラムでは、小学校で四日市独自の指導方針、読解力の視点という、そういうふうなものをつくっていきます。これは後で説明をしてもらったらいいかかなと。

それから、算数についても、幼稚園のころから実践例のデータベース、これについて、遊びを通して算数の力をつけていくというふうなデータベース、それから家庭学習支援、よっかいち版数学コンクールというのを置いておりますので、これなんかもおもしろい取り組みですので、紹介していただいて。

あと、運動大好き、これで幼稚園から25メートル走、立ち幅跳び、テニスボール投げ、こういうふうなもので、遊びを通した中で、体力、運動能力を身につけていくと。それがずっと3歳、4歳から中学校3年生、15歳まで、1枚のカードでそれを記録していくと。そうすると、自分の伸びがそれで見えてとれるという、そういうふうな試みもしておりますので、ちょっと補足してください。

○高橋指導課長 読解力にかかわる部分で、今、プリントをお渡しさせていただきました。読解力向上に関わる「20の恵み」ということなんですけれども、こちらに木の絵があるんですが、ここに4つの実がなっております。教科書を読む力、それから新聞を読む力、解説書を読む力、それからパンフレットを読む力、このような力を15歳の終わりまでにしっかりと身につけたいというようなところで、先ほど、今度はこちらの色のついたもの

なんですけれども、これは学習指導要領から20の恵みというのをとってきたものです。これは、説明文のところの学習指導要領に書かれている部分です。

濃く示してあるところが各学年で中心になって指導する部分なんですけれども、こういうようなところを抜き出しまして、各先生方、学校に示すことによって、このあたりを重点に指導していくと、そういうようなところを明確に示して、各学校で指導していくと、このようなところを今研究しております。

これは、大学の先生にも提示をさせていただきながらご意見もお聞きして、これを進めたいというふうに考えております。

○館政策推進部長 ありがとうございます。1つの例として挙げてもらったんですね。

○加藤教育委員 例えば、英語も3番目の柱になっていますが、私は、この英語の中で、正しい英語で外国の方と話がしたいという、まず、そういう気持ちを起こさせる意味では、この表の中で言うたら、五感を通した国際理解というのが就学前あたりからありますよね。五感を通した国際理解。こんなことで、実際に外国の子どもと触れ合いながら、やっぱり英語を学ばなあかんとか、学びたいという意欲を持つ。

だから、これも先走りますけど、かつて四日市がロングビーチと姉妹提携して中学生派遣をやっていただいていた。あれ、今途絶えていますけど。例えば、あれほど大がかりなことにまでいかななくても、もっと気軽に中学生あたりで外国の子たちと直接触れ合うような機会をたくさんつくってやるということが、本場で自分の思いが英語で通じたというその喜びというのが何よりも英語を学ぶ意欲になると思いますので、それを低学年から国際理解、五感に訴えた国際理解というのは英語とかやなと思うんですが、これは、いわゆるさっき言うた、スキルの中の1つにさせていただきたいなと思う1つです。

例えば数学やったら、私は、数学的に表現する基礎力って、これはやっぱり大事だと思いますので、三段論法ではないですけど、そういうふうなことを大きな軸にしながら、数学の力をつけてやるとかね。

運動の楽しさというのは、まさに基本的な技能が、ちょっと腕をようけ振ったら、1秒、2秒速くなるわけですから、小学校の先生に、あるいは幼稚園の先生に走るための基本的な技能というのはここだということを、やっぱりスキルとして身につくような場面をたくさんつくってもらおうと。

だから、そういった意味で、これを一つ一つ洗い流していくと何かキーになる言葉が出てきますので、これを大事にしてほしいなと。そうしないと、このプログラムはなかなか

日の目を見てこないというふうに思っています。

だから、国語ではこういう手法でこうやって洗い出していただいて、20の恵みって、これは1つの試みで評価していますし、ほかにもこの手法ばかりとるんじゃなしに、まさに英語でしたら、五感を通した国際理解、こちら辺にもポイントを当ててもらって、よし、中学生、もう一回海外へ行ってこいというぐらいの話にもなれば、それはもう一ついいことかなと。多くの子どもに。

最近、外国の船もたくさん四日市港へ来てくれますので、あそこへ中学生を派遣するだけでも随分と違いますよね。だから、そういう生きた国際理解、国際感覚を養うという場面が、商工会議所あたりと連携したらいっぱいやっていただけると思いますね。夢も入っていますけど。

○館政策推進部長 ありがとうございます。

いろいろと加藤委員が重点的にやらなあかんと思うところを幾つか言っていたと思うんですが。

○渡邊教育委員 教育プログラムの中に、今まではどうしても視野が小学校、中学校って大体限られていて、就学前はつけ足しみたいなものだったんですが、それが1本の筋で通すという、こういう観点というのは今まではあんまりなかったもので、非常に重要な点だと私は思うんですよね。

だから、いわゆる小1の問題だとかというギャップ、ああいったものも、こういうような1本の保育園あるいは幼稚園、そういうようなところにまでこういうものが筋が通るようにするって、現状では、なかなか私、見えてきていないものですから、このところを、ほんとうは見えていないんだけど、非常に大事であるということで、ぜひこういうプログラムをしっかりと全てのところにまで持っていくように。

しかしながら、小学校の段階でも、各子どもの教育環境、家庭環境によって随分違うと思うんですよね。だから、そのこのところの違いがある中を踏まえて、どういうふうはこのプログラムで具体的に落とし込んでいくか、そこが非常に成果につながるころなので、そこを少し、見えていないところを、もうちょっと具体的にどう落とし込んでいくかという、これが大事だと私は思うんですよね。

○館政策推進部長 就学前というのはどういうふうな関係ですか。

○廣瀬教育監 現在、学びの一体化というところで、公立の保育園、幼稚園のところは中学校区で連携してというところがございます。たまたま保育幼稚園課も、私立の幼稚園さ

ん等からそういった小学校と連携の機会を持ちたいという要請を今受けているところですので、このプログラムで具体的な、先ほどご指摘のあったとおり、それぞれの発達段階におけるスキルであるとか求める姿を具体化できた段階で、そういった私立の幼稚園にも手を伸ばすといったら適切かどうかかわからないですけども、入らせていただいて、小学校で考えている教育についてご理解いただくとともに、こういった就学前、卒園するときの姿というのをお互い意見交換しながらつくっていきなるといいかなというふうには考えております。

○館政策推進部長 私立が1つ課題ですね。

○渡邊教育委員 だと思います。

○廣瀬教育監 そういったお声を私立幼稚園協会の会長からもいただいておりますので、これは幸いかなと今思っております。

○松崎教育委員 私立のお子さんのほうが、どちらかという幼稚園のほうがかなりこういった教育的なものには以前から力を入れているところがありますので、せめてもの公立の幼稚園、公立の保育園もこういった小学校のスタート地点で、私立と同じだけの環境でも負けずにきちとした最低レベルのものを与えてあげるといのは一番大事なことだと思いますので、スタートでそろそろような、こういった意識を持っていただけると大変ありがたいなと。

○館政策推進部長 逆に公立のほうがおくらしているんじゃないかということですね。

○松崎教育委員 やはりそういうのは昔から言われていますので。

あとは、いろいろと今回、前回もお話ししたんですけど、大変、どちらかという、家庭学習支援といったものや読解力の視点においても、できる子、できない子両方を支えてくれるようなプログラムが今回は入れていただいておりますので、非常にありがたいと思います。

できれば、それプラス、やはり一人の落ちこぼれもないような、全員が学習に参加できる体制である、何かそういったプログラムをうまく組み込んでいただけると、人的配慮なども要るんだと思うんですけども、何かそういうプログラムも忘れないであるよというのをきちっとあらわしていただけると、さらにこういったものが生きてくるかなという気がします。

先ほどの中学校のスピーチコンテストの「THE BENRON」のところでも、できる子だけの弁論大会にならないように、中学生全体に力がつくような何か工夫もされてい

るといふふうにも書いてありましたので、そのあたりも今回伺いたいなといふふうにも思っています。

○館政策推進部長 何かその辺、ありますか。

○高橋指導課長 英語でコミュニケーション I N 四日市プログラムの一番上の星の部分なんですけれども、英語で地域発信というところがございます。そのところで、これは四日市を紹介する文章をつくって、中学校卒業時に、それが全ての文法であったりとか、必要なものであったりとか、そういったものが入ったものを作成しまして、それを四日市の子は卒業すると四日市を英語で紹介できるという、そういうような。これは段階を追って、小学校の段階では、地元の地域、あるいは学校の発信というようなことが英語でできるというふうな段階を踏みながら、先ほど言ったように、誰もがある程度の力を持ってやっていけるような、そんなような取り組みをしていきたいというふうな考えています。まだ具体的にはそのぐらいなんですけれども。

それから、BENRONにかかわってですけれども、そこに1分間コメントというのがあるんですが、やはりこういうようなことも取り組みながら、一人一人の力を伸ばしている、そういうようなことができるような場の設定とか、そういうようなものは考えておりますので、それがすぐ弁論大会に出られる子までというところまではいかないとは思いますが、人の前でしゃべること、話すことであったりとか、自分の主張を述べることであったりとか、そのようなところは機会を十分与えていきたいなというふうな考えています。

○加藤教育委員 今の課長のお話を聞くと、例えば英語で、小学校で地域発信、中学校の英語で地域発信、これらを含めてスピーチコンテストにつなげられたらいいのかもわかりませんね。あるいは、小学生もスピーチコンテストに、小学校の部としてかかわってくるとかね。初めは、決められた英文をきつと四日市の地域発信でやっていくんですけど、例えばコンテストについては独自色も含めてといいですよという自由裁量の部分も含めて。中学生20人が集まってくる、私立も含めると二十数名集まってくる中に小学生も入り込んでやれば、これはまさに四日市版ができるので。

これは、今お話を聞いて私も思いついた話で具体性もないんですけど、そうやっていくと、このスピーチコンテストもまた今までの歴史の流れからちょっとひねって、四日市版スピーチコンテストになってくるので、中学校と小学校でやる地域発信の英語の集大成とした姿として、スピーチコンテストもあってもいいのかなという気がしましたね。そこも

つなげていただく。

○館政策推進部長 1つアイデアとして。

○加藤教育委員 希望です。また検討してください。

○豊田教育委員 少しあれなんですけど、午前中のお話にもありましたけど、多様性というものを考えると、松崎委員も言われたように、そういうコンテストに出られるとか、あるいは人前で話すことがそんなに苦痛じゃない子どもたちというのは、そういうふうにとんどん伸ばしていただく機会とかというのもあるけど、一律というのが難しい部分に関して、少しプログラムの中で何かお考えを入れていただけるとありがたいかなと思うのと、それから、就学前から一貫してというのが、例えば、運動のときには1つのカードを使いながらとかという話も少しあったかとは思いますが、保育園の先生方と幼稚園の先生方というのは少し立ち位置が違っていたりする部分があるので、そこがうまくつながっていける仕組みをつくっていただくこのプログラムがよく動くのかなって。もう既にお考えいただいているとは思いますが、そのあたりを見えるようなものがあるといいなというふうなところが。

○加藤教育委員 ありますよね。でも、全て6本の柱の基礎を幼稚園に求めるのでは、私は幼稚園や保育園が大変やと思うんです。でも、運動の大もと、走るとか跳ぶとか投げるといのは、やっぱり幼児からちょっとでも早く始めたほうが技能がつかますから、こんなのかなは幼稚園でもっと力を入れてくださいよというお願いをしているところですし、例えば、その横の5番の人間関係の基礎を形成って、これは今の保育園や幼稚園でもやっていたことですから、いよいよキャリア版となると、やっぱり小学校高学年から中学校にかけて、あるいは中学校の卒業時点にかけてやっていくことですから、重点の置く場所はどこかというのはみんな変わってきますので、小学校で6本、幼稚園で6本、中学校で6本って、これはやっぱり無理やと思いますね。

だから、どこかでこれは絶対小学校の低学年で大事にしたいねというところと、これは中学校になってからで十分、あるいは中学校からその次の段階の高校へ向けて選択していったらええことですよというようなこともあるので、あんまり一律に考えていただくと、今、豊田委員がおっしゃったように、でこぼこがあったほうがいいと思いますね。

○豊田教育委員 素地は入れていただきながら、この年代層の子どもたちにはここをやっぱりおさえておいたほうがいいみたいな。

○加藤教育委員 ここというときにね。発達段階の、やっぱりタイムリーにね。

○豊田教育委員 応じたもので。あんまり過重をかけても大変ですし、先生方のことを思うと、ちょっと大変かなと思いつつながら。

○加藤教育委員 負担もあります。自然にやっていただけて。

○豊田教育委員 子どもたちが遊びの中から学んでいけるような。

○加藤教育委員 熱いうちに打てる段階と、固まってからのほうがいい場合とありますから。

○豊田教育委員 そこを小学校のああいう授業が詰まっている中につながっていけるような、ほんとうにここの、渡邊先生もおっしゃいましたけど、小学校へ上がるときがすごい、幼稚園からとか、保育園からとか、それから私立のところからとかって、多様な子が入るかなと思いますので。

○加藤教育委員 いいのができそうですね、これ。

○豊田教育委員 でも、楽しいなプログラムですよ。

○館政策推進部長 よろしいですか。

幼稚園、保育園のところからのつながりですけども、先ほど冒頭にもあったような形で連携していくと。公立保育園・幼稚園はうちの中で、先ほどの私学は声をかけていくと。ここできちとした表現をこれからしていったほうがいいですね、プログラムの中で。

市長、何かありますか。

○森市長 先ほどから就学前の話が大分盛り上がっていますが、こども未来部と教育委員会との意思疎通とか共通認識をどう持っていくのか。ともに何か議論していくための会議体とかあるんですけど。

○廣瀬教育監 今はやりとりをさせてもらいながら進めているところで、会議体自体、今はございません。原案みたいなものを部長と保育幼稚園課長にはお示しはしてありますが、この回が終わって、具体性が出てきたら、もう一度詰めていこうかなと思っています。

○森市長 庁内でその2部署はしっかりと連携をとってもらわないとあかんもんで。

○葛西教育長 ですから、この場にもこども未来部長も入っていただき、担当課も来ていただくという、そういう会議を一度していく必要がある。

○森市長 それはいいですね。

○館政策推進部長 次回に来てもらいましょう。そういう方向にしましょうか。

どうしても、今、保育幼稚園課って施設を管理するのにきゅうきゅうとしているところが、私にとってはそう見えるんですよ。なかなか教育の中身にまで。やっていますけど、

その度合いがね。

○加藤教育委員 まだ今は、かつて教育委員会がやっていたころの幼稚園の先生がこども未来部にいてくれていますから、まだ多少なりともつながりができてくるんですけど、これが将来なくなると、いよいよ、ほんとうに何か意図的に仕組んでいただかないと連携がとれなくなりますね。

○森市長 こども未来部も当事者意識を持ってもらわないといけないですもんね。

○館政策推進部長 その意味でも、新教育プログラムがそれをつなげるプログラムになっていくようにせなあかんのですね。

○森市長 あと、アクションプランで結構いろんなことをやってもらっていて、私自身、教育委員会とか現場の関係者にほんとうにご尽力をしてもらっているなという感覚はあるんですよ。

例えば学力調査にしても、年々成績は上がってきているわけじゃないですか。おおむね全国平均ぐらいまで来ているわけですよ。体力についても、体力も年々向上してきているわけで、全国との差というのはなくなってきたというところで、私自身はもっと発信をしなきゃいかんと思うわけですよ。現場は現場でしっかりとやってもらって。

まだ市民の人は昔のイメージが結構あって、四日市はまだまだ全国よりも大分低いと言う人が、これはいるんですよ。四日市で教育かみたい。教育するなら四日市と、私、言っているんですけど、結構今いいんですよみたいなことを頻繁に言うていかなあかんと思うって。広報なんかも使って大々的にどこかでね。

○加藤教育委員 昼休みも教育長、言うていましたよね。

○森市長 あかん状況ならこんなの言いませんけど、いい状況なので、これはもっと発信をしていかなあかんと、新学習指導要領が始まっていくので、すごくいいタイミングやなと思っています。このスタートと一緒に新教育プログラムが始まっていくというのは、1つの大きな目玉になりますし、発信をもっとしていきたいなと個人的にも思いますし、あらゆる市のツールを使って、これでもかというぐらい言うていきたいな。いいときに言わないと、言う機会はないですから。ずっといい状況やったらいいんですけど。でも、それは役割かなと思っていますね。

あと、加藤委員がおっしゃられたように、英語をやっていく中で、英語に触れ合う機会をもっと学校以外のところにつくっていく必要もあるんじゃないかなと私も思うんですね。TRIO、ロングビーチへの中学生派遣は、まだあったんですか。

○加藤教育委員 昔あった。

○森市長 それをどうするかというのはまだ置いておきながらも、確かに四日市は、外国と、ロングビーチと今年55周年にもなりますし、英語じゃないですけど、天津ともありましたりとか、経済交流もハイフォンとかやっていたりとか。

あと、東京オリンピックの体操チーム、カナダチームが四日市で事前合宿を開いたりするわけじゃないですか。外国客船も寄港し出したということで、非常に環境としてはある。チャンス、機会としてはあるので、四日市の子どもだからできるというのを教育予算以外でも何か考えていかなあかんのかな。

○館政策推進部長 そういうところに子どもをもっと来させるような、各部局、そういう海外との交流のようなイベントに子どもを引っ張ってくるような視点を持つてはどうかということですね。

○森市長 高校生なんかは結構。あと、環境未来館もかなり海外の人に来てもらっていますよね。そういうのも何かやっていければいいですよ。うまいこと回していければ。

○加藤教育委員 中学生を海外へ出さなくても、海外を四日市へ呼び込むという。

○森市長 そういう状況になってきていますからね。

○加藤教育委員 これもありますから、そこに中学生の姿があると。交流ができていると。私の英語も通じたよという、これはすごいことだと思いますので。あの経験は、よし、英語を勉強しよう。

我々、大人になってからでも、外国の方としゃべるときに、もっと学生時代、やっておけばよかったって悔やみますけど、そのとき思うけど、実行力が伴いませんから、いつまでたっても会話ができないということになりますから、ぜひ学生のうちに。

○館政策推進部長 英語でコミュニケーションのプログラムのところにそういう視点を入れましょうかね。

○森市長 そうです。部局横断で何かできることとかね。

○加藤教育委員 大きな土台ですね。

○森市長 募ってもいいかもわからないですね。

○葛西教育長 その際に、例えば今、商工農水部で萬古焼の体験を各学校でしてもらおうということで、地元の陶器の会社に頼んで、そして、その方に各学校へ行っていただいている。あるいは、中小企業で活躍したOBの方が橋北交流会館で、小学生、中学生相手に、いわゆる技術的なことをいろいろ教えていただいているという、そういう塾のような

ものもやっていただいておりますよね。

ですから、教育委員会が全てプログラムを組んでやっていくということじゃなくて、実際、夏休みに、広報よっかいちを見ると、各部局がたくさん、小学生、中学生の講座をやってもらっています。あれはもう教育委員会から独立して、それぞれのところがやっていただいておりますよね。オール四日市という形でプログラムを組んでいくという視点がやっぱり大事なのかなというようなことを思います。

ですから、四日市の中学生を学校教育で全部それを賄うということは、これはとてもできませんので、海外からお客さんを迎えると、それが土日であれば、例えば商工会議所でそういうふうな企画を出していただくと、そこへ私ども指導課も入らせていただいて、一緒になってやっていくというような、そんな形でないとパンクしてしまうということもありますので、そこは十分気をつけていきたいなと思っています。

○加藤教育委員 そのとおりで、ただ、今までないのは、それをコーディネートする係がないんですよね。だから、商工で小学生を集めた、中学生を集めた、あるいは農水でこんなことをやっているということも情報としてぼつぼつとは出てきても、それを全体をきちっとコーディネートして、どこかへ、学校なら学校へも情報発信をきちっとしていくような、そういう組織がないので、小学生や中学生、幼稚園を対象にしたイベントがあるときは、どこかの部署へ行けば全部のことが瞬時にわかると、あるいはそんなホームページをつくってしまうとか、何かそういう工夫があるともっと行きますよね。

それぞれの担当がそれぞれで知っていても全体にはなっていませんから、教育の中でもそれは共有できていませんよね、今、情報としては。広報を見て、個人的に行くことはあっても、ああ、こんなことをやってもらっておるんやというようなことはありましたが、だから、それも学校へずーっと同じような情報をまとめて発信すれば、先生方ももっと利用しやすくなるかわかりませんので、これはぜひコーディネーターが欲しいですね、そういう情報の。

○館政策推進部長 そういう情報が集まる場所ですね。

○加藤教育委員 そうです。

○森市長 教育委員会は全部把握しているんですか、一応は。わからないものも。

○葛西教育長 把握は、結局のところ、広報よっかいちを見て、ああ、これだけ来ていただいているんだというふうな、そういうことになります。

○加藤教育委員 だから、広報マーケティング課ぐらいのところでもいいので、そういう

小中学生を対象にしたイベントはいつも把握してもらって、そこへ聞けばわかるという。

○館政策推進部長 その辺は一回、中で議論ですね。

○加藤教育委員 ここからは館さんの得意な分野で、政策的に。

○館政策推進部長 いや、得意な分野でもないですけど、各部局も小中学生を対象にする
とええなと思っておることが結構あたりして、やるわけですね。それは、いろんな意
図があるんでしょうけど、決して教育的観点がない場合もありますけれども……。

○加藤教育委員 なくてもいいんです。

○館政策推進部長 なくてもいいんですけど、だから、そこが一回、部長会議とか、そう
いうところで報告をしてもらおうとか、あるいは推進監会議の中で情報共有するとか、何か
システムをつくれればいいかもしれませんね。

○葛西教育長 だから、以前は結構、教育委員会に話が来て、教育委員会もしてくれない
かという、そういうことだったんですけれどもね。

○館政策推進部長 協力が必要な場合は来ますわね。

○葛西教育長 ところが、今は、それぞれの部署、課で独自でやっていたら、そ
れこそ自立してやっていたらという、そういうありがたいことになっていますね。

○加藤教育委員 それはそれで教育にとってはいいんでしょうけど。

○森市長 事務的に集約できればいいですもんね。

○館政策推進部長 できればいいし、今回のプログラムの6本の柱の中にかかわるところ
でいいんじゃないかなというふうに思いますけどね。

○加藤教育委員 それは四日市ならではの教育になるのか、5になるのか。

○館政策推進部長 6番か、英語になるのか。

○加藤教育委員 あるいは英語にも。

○館政策推進部長 6番が多いんでしょうけどね、案外、各部局がやる場合は、6番にか
かわるところを子どもにも知ってもらおうと。

○加藤教育委員 それは1つまたその要素として入ってくるといいですね。

○館政策推進部長 いずれにしても、このプログラムができましたら、当然、全庁的に全
部周知をして、例えばこういうところで各部局が何かやる場合には集約させるような、そ
んな仕組みにできたらええなと思います。

○森市長 それ、つくりましょうね。

○館政策推進部長 できると思います。どっちかという、まだまだ、前のアクションプ

ランとかその辺も、あんまり関係なかったかもわかりませんが、全部局は把握していませんから、現実問題としては。

ただ、今回の新教育プログラムの特に6番あたりは、これは全部局、知っておらなあかん話なので、こういうキャリア教育という地域資源活用プログラムは。

○加藤教育委員 あるいは、今後計画いただく各部局の行事、イベント等は、この6本の柱のどれかに寄りかかってもらって、最低、計画していってもらおうと、よりこれも太いものになっていきますよね。

特に4、5、6あたりの分野であれば、あるいはそれに英語も加えると。

○松崎教育委員 どちらかというと、6番が結構どこのところにも組み合わせさっていくような、5番もそうなんです。5、6を組み合わせられるようなコンシエルジュ的な何かがあればいいですね。

○加藤教育委員 またまた夢が大きくなりましたよね。すごいことができそうやから。

○森市長 保護者は情報を欲していますからね。

○館政策推進部長 4番の体力のところはスポーツ課が市長部局に分かれましたので、学校のスポーツと違うような、スポーツ課の主催するような、子ども向けのもあるんですよ。そういうこともありますので、市長部局と十分連携していくような形にぜひ持っていきたいですね。

○加藤教育委員 それは共有いただくとありがたいですね。

○館政策推進部長 わかりました。

それでは、大体ご意見は頂戴しましたでしょうか。

それでは、今日いただいたご意見をさらに反映して、秋には来年度に向けて、もう少し深めた計画にしていきたいと思っています。

まずは、どうもありがとうございました。ご意見ありがとうございました。

4 教員するなら四日市プロジェクトについて

～子どもと先生の笑顔あふれる学校づくり～

○館政策推進部長 それでは、次の項目に入っていきたいと思います。教員するなら四日市プロジェクトということでございます。

昨年度の総合教育会議におきまして、教職員の負担軽減のための方策についてさまざまなご意見を頂戴しました。ここで現場の声もお聞きしながら、一部は今年度の当初予算に

も盛り込ませていただいて、やってきているという状況でございます。

このプロジェクト、教員するなら四日市プロジェクトの案、これを今、途中でモデル的にやっているところも含めて、それを踏まえた案をつくってきておりますので、まず事務局からこの資料の説明をお願いしたいと思います。

○廣瀬教育監 教員するなら四日市プロジェクトのA3判をお願いいたします。

目的といたしましては、多忙化する学校や教職員の現状を把握して、教員の負担軽減に取り組む。これを進めることで、子どもと先生が明るく元気に向き合うことができる、笑顔あふれる学校をつくるというようなことで進めております。

特に、教員が授業等の本来取り組むべきところに専念しづらい状況にあること、それから、長時間勤務が常態化している現状、こういったことを踏まえて、下の3つ、真ん中のあたり、取り組みの柱でございますが、教職員の担うべき業務に専念できる環境を確保する、それから部活動の負担を軽減する、長時間労働という働き方を改善するという大きな柱の中で取り組みを進めておるところでございます。

2枚目をお願いします。

取り組みの事業スケジュールでございますが、大枠で、教員の担うべき業務に専念できる環境を確保するについては、業務アシスタントというものをモデル校に配置しまして、毎月、その状況について調査をかけておるところです。

あと、校務支援システムについては、システム導入の検討委員会を開催しまして、その効果について検討する、または先進自治体を視察して、成果や課題の聞き取りを反映させていく、そういうことを進めております。

部活動の負担を軽減する取り組みにつきましては、部活協力員をモデル校に配置しまして、これについても、毎月、実態調査を図っておるところでございます。

この調査結果については、下の表でございますとおり、学校業務改善検討会を定期的に持ちまして、例えば7月の②と書いてございますが、4月—6月の総括についてここで取りまとめをさせていただきました。

取りまとめ等に当たっては、中教審の学校における働き方改革特別委員でもあります妹尾先生に入ってください、ご助言を聞きながら進めておるところでございます。また、学校業務改善研修といたしまして、妹尾先生に校長、教頭、事務職員を中心に、業務改善の研修を進めておるところでございます。

3ページは、特に、業務アシスタントの配置についての結果でございます。

今現在、モデル配置しておるところは、ごらんの6校、大中小規模、学校規模に分けて、小中学校各3校ずつに配置しております。

主な業務としましては、4月当初は印刷が大量にあります。それから、5月になると、スタディ・チェックやら調査のデータ入力等がありまして、そういったものを進めていただいております。

グラフを見ていただいた結果が、右上の調査結果からわかったことというふうに示してございますが、モデル校の教員の89.6%がアシスタントに業務を依頼しているうち、96.4%の教員が生み出された時間で本来業務を行うことができたと回答しております。アシスタントが配置されたことで、事前に段取りせなあかんで、自分の働き方を見直すようになったと94.1%の者が回答しております。

成果といたしましては、③でございますが、このアシスタントの導入により教員の多忙化は解消されて、子どもと向き合う時間が確実に増えているのではないかと考えられます。

まだまだアシスタントの業務内容が整理されていないため、うまく使いこなせていない状況がございますので、今後の方向性ですが、アシスタント業務の内容や依頼方法等をルール化して、適切な活用につながる体制の確立を図っていかなくてはならないというふうな課題がございます。ただ、一定効果があると思いますので、今後は全校に配置を進めていきたいと考えてございます。

4ページでございます。

こちら、校務支援システムの導入の取り組みについては、先進地視察、5月、6月にごらんのような市町に行っていただいております。

東京都の板橋区の視察にございますとおり、6割の教職員が支援システムの導入によって効果があったと実感していると。特にあいた時間は、授業準備だけでなく、時間外勤務の縮減にもつながっていると。特に副校長、教頭職に相当する者には、8割が時間外を減らすことができたというようなことを聞いてきております。

そういった中で、四日市に合ったシステムの構築という形で、導入機能については次のようなものを案として挙げておりますが、働き方改革の中で追加検討機能として、出退勤管理ができるツールを入れたいと考えております。

また、1市3町、教職員異動が盛んに行われる菰野、朝日、川越とも情報交換しながら進めているところでございます。

4番の右側については、校内の予算、整備の予算、樹木の剪定の額でありますとか、そ

れから、専門性を生かす体制、小学校のスタート支援事業、サポートルーム事業の29年度、30年度の比較予算、それから、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカーの29年、30年度の予算の比較でございますので、またごらんください。

5ページでございます。

こちら、部活動協力員の配置でございますが、こちらについても大中小規模、学校規模ごとに3校、部活顧問にかわって部活の見守りを実施する人員を配置しております。

グラフの中の説明は、右上のとおり、調査結果からわかったというところで、モデル校の教員の96.7%が助かっていると。特に、小規模校においては全ての教員が助かっていると回答してございます。これによって生み出された時間、83.3%の教員が時間外労働が減少した。

といいますのは、通常、中学校、部活が終わらないと、会議であるとか家庭訪問とか行けないわけですがけれども、安全管理をしてくれる人がいることで、自分の勤務時間内、4時から6時のあたりに会議ができる、そういったところで時間外労働が縮減したというふうにも考えられます。

ただ、グラフを見ていただくと、中規模のところの青い線が少し短くなっておるんですが、これは、楠中学校においては陸上部の専門家がいなかったために、陸上部を特定して指導するような働き方を少ししておりますので、全体の波及効果はあまりなかったという、ほかの2校に比べて少なかったということでございます。

成果と課題、3番でございますが、先ほどもご紹介させてもらったとおり、今まで部活動が終わってから行っていた業務が勤務時間に行うことができるので、負担軽減につながっている。しかし、この協力員の制度では土日の引率ができないことから、そういった土日の時間外の削減にはつながっていない状況があるというところでございます。

今後の方向については、効果が高かった小規模校に対し重点的に配置をしていこうと考えています。行く行くは全校配置も進めていきたいと考えています。

また、一番下、部活動ガイドラインの策定をしたことによって、休養日、1週間のうち少なくとも2日は休養するという取り組みをしました。このことによって教員の時間外は大きく削減をされてございます。

6ページでございます。

長時間という働き方を改革する。こちらについては、上の丸の4つまでは教育委員会が市内に一定で進めているところでございます。学校ごとには統一して、こういった労働時

間縮減の目標であったり、休暇の取得日数等、目標設定をする。それから、定時退校日であるとか、80時間を超える時間外の削減等、目標を決めて取り組みを進めていただいております。一定全体的には効果が、少しずつではありますが、出ているのかなと考えています。

それから、6ページ、先ほどご紹介させていただきました妹尾先生、会議に入らせていただいて、アドバイスを受けております。そののいただいたご意見を簡単にご紹介いたします。

太字のところです。

今、働き方改革を進めておこななくては、四日市に優秀な教員は集まってきませんよと、教育するなら四日市となるためには、まず、教員するなら四日市というふうな条件を整備していく必要があるというふうにおっしゃってございました。

その中でも、四日市市が学校業務アシスタント、部活動協力員、校務支援システムの導入、こういった検討を行っているのは的を射ていると。特に、多忙の要因として、部活動であったり、成績処理、こういった業務が大きいので、このあたりから切り込んでいこうというの的を射ているというふうに評価をいただいておりますが、時間外を減らしていくためには、どこまで丁寧な仕事をするのかという、過労死ラインを超えてまで働き続けていくのは無理があるので、限られた時間で教育的な効果を上げていこうという働き方に転換する意識改革を図らないと、まだまだ道半ばであると。

この両方をにらんで取り組みを進めていきなさいというようなアドバイスを受けておりますので、今後ご意見を頂戴しながら、教員するなら四日市プロジェクトを進めていきたいと考えております。

以上でございます。

○館政策推進部長 ありがとうございます。

それでは、これ自体は少しモデル的に何校かでやり始めている。その実績をもとに成果も出てきているようでございます。今後、これを推進していく上でのいろんなご意見を頂戴できればと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

○渡邊教育委員 これは、先ほどのプログラムのところの、アクションプランの総括のところ、学びの環境の充実というようなところにかかわるわけであって、アクションプランの成果を上げるためにも非常に大事な部分だというふうに私は思うんですね。

教員の世界の伝統的などいいますか、慣習的な働き方というのがあって、それで、この

新しい導入について小規模校ではかなり手応えが感じられるんだけど、中規模校でなかなかそうではないというようなところ、私、なかなか理解ができないんですが、そこらのところをどういうふうに解決していくのかなというところが、この資料を読みましての感触なんですけど。

○**廣瀬教育監** 特に部活動協力員の話だと思うので、5ページをお願いいたします。

小規模校は教員の数も少ないですので、ほんとうに助かっているということはよくわかるというところですが、中規模校、特に楠中学校は、先ほどもご紹介させてもらったとおり、陸上部の顧問が専門外ということで、どちらかというところ、全体のクラブを見るより陸上部の指導に特化した形で入っていただいている。そうすると、ほかの人はちょっと見ておいてということが頼みにくいですので、全体の波及効果としては少なかったと。陸上部の顧問の先生は非常に助かっているんですが、ほかのところは恩恵を受けていない。そうすると、全体のアンケートでグラフ化すると、ここの楠中のグラフは低くなってしまっているということです。

あと、大規模校も薄まってはいくんですけども、例えば、大規模でも教育相談をする期間であるとか、そういったときに見守りをさせていただく、家庭訪問のときに見守りをさせていただくというのは大変助かっているという効果がありますが、大規模校は2人、3人と顧問がおりますので、どちらかが交代で見られるというので、何とかやれるかな。

特に決定的に、小規模校は会議をしたら誰もいないみたいになると部活動ができなくなってしまいますので、ただでさえ部活動数、少ない中で、それも教育委員会が週2回休めと言っている中で会議をして、また休みというふうになると子どもも充実しませんので、有効に活用していただいておりますので、効果は高いのかなと思っています。

○**館政策推進部長** 部活動協力員として雇っておるけど、どっちかというところと指導員っぽいところがあるんですね。

○**加藤教育委員** 専門のところにおいて。

○**葛西教育長** 楠中学校の場合はね。ですから、陸上部へ入っていってしまうと。だから、陸上部の子どもたちの活動の質は上がっていく、専門の先生ですから。子どもたちにもいいと。

もしこれを部活指導員に格上げすると、その部は土日に、要は試合があるときに、この指導員の方が子どもを引率、監督という、そういうことが可能になると。だけれども、

22校にそんなにたくさんの部活の指導員なり部活の協力員は入れることはできません。ある程度の数です。

そうした場合に、やっぱり学校によっては部活動協力員として一定のクラブを見てもらうと、幾つも見てもらうという、そういうのも大変助かると。一方、部活の専門の指導者のいないところには、こういう専門家がいれば部活動指導者として入ってもらおうというのも、それもいいという、そういうことになるのかなというようなことを思います。

○森市長 これはいろんなケースをするために、あえて入れたんですよね。

○葛西教育長 そうです、今のところはね。

○森市長 楠中は。

○葛西教育長 そうです。

○森市長 そういう意味では、大規模校は二、三人いるわけですよね。平均すると、頭数で割ると。

○葛西教育長 そうです。

○森市長 大規模校ってそんなに入れる必要ないですよね。どうなんですか。どっちかといえば、小規模校で1人しかほんとうにいないところもたくさんあって。

○葛西教育長 そうです。だから、まずは小規模校、小さい学校で入れさせていただくと。大規模校でも、やはり専門の指導者がいない、そういうところもございますし。

○館政策推進部長 どっちかといったら専門指導員。

○葛西教育長 それから、全教員で教育相談だとか、家庭訪問だとか、そういうときになると部活を中止しなきゃならない。そうでなくて、協力員が1人おれば、それが体育館を見て、それから運動場を見るという、そういうこともできますのでね。

○廣瀬教育監 協力員、かなり部活の専門性の高い、今まで指導の熟練した人を入れていきますので、よく家庭訪問や教育相談の見守りやと、担任以外の人が見守ると、あんまりスポーツに精通されていない方がグラウンドで見ておらないかん。そうすると、安全管理の部分で大変不安である。そこにおるんやけど、そういった運動に精通した方が来ていただくと大変安心やというのはやっぱりあります。

○森市長 そういう意味では、全然変わるんですけど、大規模校の中での先生の平準化というのはできているのかなというのはありますよね。

専門外ってあるじゃないですか。専門性のある先生が入っちゃうと、専門外の先生ってちょっと引いちゃって、現場へ行く機会ってそんなにない気がするんですけど、小規模校

って1人しかおらんかったら、それは行かなあかんって、専門外にかかわらず、結構、クラブ、見なあきませんよね。

○加藤教育委員 確かにそういう状況は選べますから、大規模校の場合は。あるいは、1つのクラブで2人なり、場合によっては3人ぐらい顧問が充てられますので、今、市長がおっしゃるようなことも起こらないこともないですね。小規模校はいやが応でも、このクラブって顧問を決められたら絶対やらないかんわけですから。

○葛西教育長 その点、どう。大規模校、朝明中学校。

○廣瀬教育監 どちらかという、専門の人が行っていると、専門じゃない人はいないときにお助けするぐらいの感じでやっていますね。

それから、あと、例えば、男性の教諭が女子のクラブを持っておったら、メンタルとか相談は女性の先生が持ってくれるとか、そういうような役割分担はしてもらっています。

○森市長 そこは否定しないんですけど、平準化を考えると、そういうのもうまいことやっていったほうがいいんじゃないかなとは思いますがね。

○葛西教育長 確かに部活動については、そういう軽重はあります。でも、学校の仕事全体で見ると、例えば教務主任だとか、学年主任だとか、生徒指導主任だとか、進路指導主任、そういういろんな主任がありますよね。ですから、学校全体としては、そういうものをバランスよく、どう教員を配置していくかということが1つの課題になります。

ただ、中には、学年を主任し、生徒指導を主任しという、中には進路指導というような、そのように兼ねてしまうようなことはありますけれども、それはやっぱり平準化していかなくちゃならないということで、今はなるべく散らすようにはしておるんですけども。

○森市長 自分の専門じゃないんですけど、得意分野でうまいこと配置できたら、それが一番いいんですけど、それが難しい。小規模校なんかはもう決め打ちしていくしかないという。

○葛西教育長 学校教育課長、どう。

○海戸田学校教育課長 学校教育課長です。

大体、平準化できたらいいんですけども、やっぱり得意、不得意もありますので、その辺は上手に各学校で回していってもらっているというのが現状でございます。

○加藤教育委員 その平準化の話とも関連するかわかりませんが、今回の1ページ目の教員の担うべき業務に専念できる環境を確保するって、改めて見せてもらおうと、ここの部分で学校が取り組むべき黒丸がないんですよ、この項。部活動休養日の設定とか、学校で

統一で取り組む項目の目標設定というのは学校が取り組む黒丸があるんですけど、一番上、ないんです。

意外と先生方の多忙感とか困り感というのは、先生方一人一人、全部違うように私は思う。単に経験年数が浅いか深いかだけやなしに、性格的な部分も先生方、十人十色ですから、いろんな面で意外と先生の困り感、多忙感というのは異なりますので、ぜひ学校が取り組むべき内容の黒丸の1つの候補として、管理職と教員一人一人の対話の機会の確保という文言を入れていただくのがいいのかなと。

校長にとってはそれがマネジメント能力の高揚にもなりますし、先生方にとっても、たとえその場で多忙感や困り事が解決できなくても、管理職と私ときちっとこうやって話をして今あると。今も市長がおっしゃった、何とかこのやりくりをつけながらという、そのやりくりもそういう機会があれば。また、ここに明記されると、やっぱり管理職も意識して。

かつて自己評価でしたか、教員一人一人の取り組みが何かありましたね。あのときも対話ということを経済委員会から現場へおろしたと思うんですけど、そんな一環として、教員するなら四日市プロジェクトでも管理職と個々の先生お一人お一人の対話を、例えば、全部の職員に二月に1回は持ちなさいとか、学期に1回はぜひ持ちましょうというふうなことをきちっと書いていただくと、校長もこうやって言われていますからやりますという、初めはそういう言葉がけでも職員を引っ張り込めますので、校長室へ。だから、そんな中で、たとえ30分でも。

だから、幼い子どもを抱えた先生にとっては、たった30分、学校へ来るの、あるいは8時半ぎりぎりにもしてもらおうと私はありがたいんですというのものもあるかわかりませんので、じゃ、そうしましょうとその場で決めることも可能ですから。若い先生やったら、卓球部の顧問、言われましたけど、私はあれだけは外してもらいたいんですというのが出てくるかもしれませんので。

何かそういう管理職と個々の教員が話す機会をはっきりとシステムとして位置づけてしまおう。学期の際、幾ら頑張っても1回ぐらいやと思います。年間1回ではちょっと弱いので、学期に1回ぐらいで、そういう機会を教育委員会として黒丸でもう示してしまおうというのもあるといいのかなと、改めて今見せてもらって思いました。

どうですかね、学校教育課長。

○海戸田学校教育課長 学校教育課、海戸田です。

今は、自己目標管理も含めて、現在、学校では管理職との対話を必ずするというようになっていて、期首面談、それから期末面談、必要に応じて中間面談もしておりますし、その中の自己目標管理の中には、多分、クラブの部分も含まれていると思いますので、部活動、どうというのは必ず話題にはなっていると思います。顧問としてどう、校務分掌、どうという部分は。

○加藤教育委員 それじゃ、プログラムもぜひ黒丸に入れてもらおうといいかなと思います。学校が取り組むべき課題。

○森市長 そういう意味では、現場の方も業務の整理をしっかりとしてもらおうとかですね。市が全部やるみたいな。

○葛西教育長 おっしゃるとおりなんです。これからの課題は、今、市長が指摘された、個別の業務の役割分担と適正化。いわゆる平準化に向けての役割分担と適正化。

それで、それともう一つは、例えば登校指導なんかもありますよね。これも午前の会議で出たんですけども、これは教育委員会及び地域の人が主にやるべきだとして文部科学省としては出しているところ。ところが、実際、この四日市でも、先生方も通学路の安全確認という、そういう面に出ているという、そういう現実があります。

ただ、いつまでもこのような形ということは、これはやっぱり好ましいことではない。それで、私たちは今、コミュニティスクール、この中で通学路の安全ということを話題にして、それこそ地域全体で通学路、子どもの安全を見守っていただけるようにということで学校にも働きかけているわけなんです。

こういうことが多分にありますので、今言われたような役割分担と適正化について、学校でどうしていくかということは、これから大きな課題になってくると思います。

○森市長 ぜひ皆さん、それを認識してもらいたい。

○加藤教育委員 そうですね。最近、ある校長先生とお話しする機会があって、中学校の校長なんですけど、どう、校長としてと言ったら、いや、うちの職員、真面目なんですと、くそがつくぐらい真面目と言います。だから、やっぱりそこへ切り込まなあかんよな、校長として。じっくり話して、ほどほどにする仕事と時間外をしてでも徹底してやっつける仕事とめり張りをつけなあかんよということは、これからの仕事ですねとしゃべったことがあったんですけど、まさに今、市長おっしゃるように、学校で努力するべきことって結構、風通しのいい職場づくりというのはできますから、こういう物的な支援に加えてね。だから、そういう職場の風土づくりというのは大事ですね。それを担うのは、まずは校長

先生、教頭先生やと思いますので。

○館政策推進部長 じゃ、黒丸を増やすように、それぞれ。

○加藤教育委員 ぜひ。

○森市長 あと、業務アシスタントなんですけど、今、具体的にやってもらっている仕事は印刷業務がメインだと思うんですけど、それ以外に何かあるんですか。この辺もさっきとつながっていて、もっとメリハリをうまいことせなあかんので。

○海戸田学校教育課長 学校教育課、海戸田です。

主に印刷業務ですけれども、データの入力、それから会計・集金管理、消耗品の管理、備品管理等々もやっていただいております。徐々にその範囲を拡大はしてもらっています。

○森市長 これ、4月からですよ。4月からで、初めて新しいアシスタントが入ったわけやと思うんですけど、うまいこと先生が頼めるよう、何か業務フローみたいなのが確立されているんですか。今、模索しているんですか。学校ごとに独自ルールがあるとか。

○海戸田学校教育課長 学校教育課長です。

ちゃんと学校独自にオーダー用紙をつくってもらったりして、それを優先順に並べてもらって一覧表にしてもらったり、使いやすいように十分やってもらって、1学期でこれぐらいの束になるぐらいのオーダー用紙があるぐらいでございます。

○森市長 じゃ、業務アシスタントは、学校に来れば、もう業務がぼっとたまっている状態に今なっているんですか。

○海戸田学校教育課長 業務アシスタントが多忙でございます。

○森市長 でも、それはええことですよ。行って何もせんかったというのは。

○葛西教育長 これは学校で大変評価が高いです。

○森市長 これはあまり規模は関係ないんですか。

○廣瀬教育監 規模が大きいほどやっぱり業務も多いですので、例えば、大規模校は個人の仕事を頼むような状況じゃなくて、学年や学校の仕事を優先してやってもらわないと、なかなか個人的にやってねというすきがないぐらいの業務量です。

印刷するにも1,000枚近い印刷をせなあかん学校もありますので、そうなるとなかなか、1,000枚プリントしようと思うと小一時間かかるので、そういった状況です。

○館政策推進部長 その辺の量の把握もしながら、来年度の配置を考えていかなあかんですね。

○加藤教育委員 将来的には複数配置もあるんですか、大規模校の。

○館政策推進部長 あり得るんでしょうかね。

○加藤教育委員 あり得るんやな。

○廣瀬教育監 量に応じてはそうしていけるとありがたいとは思っています。

○加藤教育委員 お金も要ることですけど。

例えば中学校なんかやったら、ある程度の規模の学校は、学年に1人ぐらいそういう方が入ると、非常にスムーズに動けるんですね。感覚的にね。小規模校は学校全体が1つの固まりですけど、中学校の、特に大規模校の職場というのは学年単位で、大体七、八人のグループで動いていますので、そこにアシスタントが入ってくると、学年主任がうまく使うと思うんです、学年で調整しながら。だから、活用度合いも非常に高まるような気がするんですね。

だから、大規模校の複数配置については、例えば3年生の学年には必ず入れて、次に2年生。1年生はちょっと待っておってというぐらいでもいいので、そんなふうに学年配当というのも、私も現場でちょっとおらせてもらった経験からいくと、いいのかなと思いますね、複数配置が実現すれば。

○館政策推進部長 まずは今年データをちゃんと分析してもらって、推進計画なり予算要求につなげてもらいたいなという思いがあります。

さっき、松崎さん、何かおっしゃられていましたね。

○松崎教育委員 もう終わりました。

○豊田教育委員 私、ちょっと細かいことなので。

今の時点で、例えばアシスタントの方が入って、現実的に時間外が削減されたのかどうかとかというのと、それから、この数値の見方がわからなくて、6ページの1カ月当たりの時間外労働短縮の目標値とか書いてあるんですけど、例えば、1年当たりの年休・特休取得日数の増加というのは、29年度目標が3.0が、28より3日増えてという目標の読み方でいいのかとか、30年度が1.8となっているのは、読み方がわからなくて。

例えば、職場環境というときによく離職率なんかが、私が以前いた職場なんかは出されるんですけども、今もお昼、お食事をいただきながら話をしたときに、1年目の新人教員の方って結構大変な環境で働かれている様子なんですけれども、その方々が離職しているのか、していないのかとかというのは、目安になっていく数値になるのかなって、職場環境のところで。それこそ管理職がそこにどうかかわっているかとかというようなことがあるのかなとは思ったので、学校の先生方の中でそういう数値を扱うのかどうか、私

は、申しわけないですけど、わからないんですが、どうなのかなというのが職場環境のことを含めて感じたところなんです。

○館政策推進部長 何か説明を、時間外の削減とか。

○海戸田学校教育課長 時間外の削減ですけれども、導入校については縮減率、それぞれあるんですけども、大体8%から多いところで40%縮減したというところもあります、配置校については。これは、アシスタントが導入されていない学校に比べてそれよりも縮減をされているという結果は出ております。

それと、年休の取得率の件ですが、これについてはこの表が減っているようなんですが、昨年度、県から2日間の特別休暇をとりなさいというのがありましたので、この2日を足したような数字ですので、昨年度、多くなっております。

○豊田教育委員 これは、維持はできないということですね、そのとり方が。今年度もそういうふうに住むのを目標にするような形というのは難しいということなんですね。去年は2日間、強制力が働いてとっているんで、そこを2を抜けば1.0というところで、今年度1.8になっていますけど。県もそういう指示を出すということは休みなさいということなので、できればそういうのが持続するほうがいいのかなど思ったり。大変だとは思いますが。

○森市長 見にくいですね。これ、わかりにくいグラフですよ。絶対時間で日数とか書いたほうがいいんじゃないですか。去年より増えているということですよ。違うのか。

○館政策推進部長 絶対数は減っているわけですね。そういう意味では、2日間の。

○海戸田学校教育課長 そうですね。

○館政策推進部長 そもそも少ないけどね。

○森市長 増加日数が目標になる？ この日数を指してとかではなく。

○葛西教育長 県が出してきている設定が、前年度よりも何日余分にとるという、そういうふうなスキームで出してくれていますので、こういう書き方に。

○森市長 だから、目標が達成されているかどうかはわからへんすもんね。実績から比べてということですよ。

○葛西教育長 そうですね。実績に比べて、次の年度では1.8日余分に休みをとろうという、そういう目標になっておるわけですね。だから、実績自体は、これはわからない。今のところ。

○海戸田学校教育課長 そうです。

○森市長 だから、29年度が目標を達成されていたら、28年度比で30年度は4.8日。

○葛西教育長 そういうことになります。

○館政策推進部長 増加分やね。

○葛西教育長 そういうふうになります。

○森市長 でも、達成されていければの話ですよ。

○葛西教育長 そうです。

○森市長 県がこういう出し方をしてくるんですか。

○海戸田学校教育課長 はい。

○森市長 具体的に、絶対日数とかで出てこないんですか。具体的な、何日休めとか。それぞれの教育委員会で違うからですか。

○海戸田学校教育課長 教育委員会の中で目標設定しなさいということです。

○森市長 じゃ、四日市はまた置きかえてつくっていったらいいんじゃないですかね。

○館政策推進部長 単純に休暇取得日数と、増加率じゃなくて、29年度は十何日、30年度は十何日とか、そういうふうということですね。そういう置き方でもええんじゃないかというようなことは可能ですか。

○海戸田学校教育課長 また考えていきます。

○森市長 わからないですもんね。

○館政策推進部長 わかりにくい。

○加藤教育委員 でも、20日いっぱいとってみえる現状もあれば、1日、2日しかとれていない現状もありますので、こちらの表現のほうが。

○森市長 個人目標として。

○加藤教育委員 個人目標的に考えるとですね。

○豊田教育委員 でも、年休と特休と合わさっているんですよ。だから、扱いが違うものを一緒にしている。その辺もどうなのか、働き方という部分から見るとどうなのかなどというのは。

○加藤教育委員 みんながみんな、ぎりぎりの20日をとりたいというのもいいんでしょうけど、それ、ほんとうにやってもらおうと現実に困る部分も、学校運営上、経営上、困る部分も出てまいりますので。とれるときに1.5日増やしましょう、年休をとという呼びかけのほうが現場としては……。

○森市長 時限的な目標みたいな感じですね。

○葛西教育長 去年よりも1日多く休もうとか、去年よりも2日ようけ休もうという、そういうふうな感じ。

○森市長 気持ちの問題ですよ。そんなのでいいんですね。

○加藤教育委員 市長がおっしゃることもそうなんですけど。でも、今の学校の定数自体が、みんなが満額の20日間とってもらおうと、学校運営上、支障が出るということは現実ありますね、スタッフの関係で。

○館政策推進部長 小規模校と大規模校とでは違うわけなんですね。

○加藤教育委員 だから、こういう表現をとらざるを得ないのかもしれませんが。

○豊田教育委員 でも、四日市で教員をやって頑張ろうと思うときに、環境がいいところというのは打っていかねばいけないと、少し何か。すぐには変わらなくても。

○森市長 学校でやっぱり変わるか。

○葛西教育長 小学校と中学校の教員で年休、特休をどれだけとっているかという、平均になるんですけども、小学校は十六、七、八、このぐらいまで大体平均としていきます。ところが、中学校は部活動がありますから、しかも、これが三泗地区で優勝し、県で優勝し、全国へ行くとなってくると、もうとても休みをとれないと。場合によっては、振りかえ休日も夏季休業中にはとれないという、そういう実態も出てくるわけなんです。

ですから、そういうことからいうと、中学校では十一、二、三、そのぐらいが年休、特休がとれる平均ぐらいになってくるのかなと思っています。ですから、結構違いがあると。

それを現時点で15日とか、18日とか、そうやって切るとということ自体が、目標にとって非常に遠い人もいるし、もう既にクリアしている人もいるという、そういうことから、多分こんな設定になってきたんじゃないかなと僕は思っているんですけども。

○森市長 でも、平均取得日数の経年比較は大事ですよ。

○葛西教育長 それは大事ですよ。

○森市長 それが伸びていかないと、今やっていることが何の意味もなさないですもんね。

○館政策推進部長 だから、個人の目標ということじゃなくて、組織というか、全体の目標としてのあり方ですね。

○葛西教育長 それはとれるよね、こっちで。

○森市長 改善させていくというのは。それも出してもらったほうがいいですよ。

具体的に、クラブの休みの日が週2あるんですから、絶対増えますよね。

○館政策推進部長 そこは市長もこだわりがありますもんね。今、市職員全体も。

○森市長 しかも、絶対増えますよね。

○館政策推進部長 じゃ、その辺も勘考できないか、一回相談しましょう。

あと、離職率みたいな話があったけど、それはなかなかあれですか。離職率、出ていないですね、その辺。

○海戸田学校教育課長 離職率は出してありません。

○館政策推進部長 ほとんどない、実態としては。

○松崎教育委員 あとは、保護者としてなんですけど、ほんとうに私、こういうふうに関わるようになって、先生方がこれほど忙しいというのは、普通の保護者なら多分誰も知らないと思うんですね。この辺の発信をもう少し、やんわりとでもいいので、していただけたほうがいいかなと思います。

学校からというか、教育委員会から、先生方、こういうお仕事をしていますとか、こんな雑務もやっているんですよというようなPRの意味も込めてやっていただけると、保護者の中にもなかなか、例えば提出物なども、まだ出さなくてもいいやとって、1週間でも2週間でも申し込みぎりぎりにはしか出さないということ、多分先生にとっては非常に迷惑な話だと思うんですが、やっぱり一人一人が学校に協力するという気持ちを持つためにも、学校としてもそういったことは協力してほしいというようなことをやんわりとアピールする感じで、先生の実態などもお話というか、何かの形で教えていただけると、ああ、そうなんだって、これはまずかったなというふうに思われる、ちょっと協力しようかなという気持ちも生まれると思いますので、何かそういうふうに、今後も先生方からもアピール、いい意味でのアピール。

○森市長 本人からはやりづらいかな。

○館政策推進部長 先生からやりにくいので、市からかな。

○松崎教育委員 学校からでも教育委員会からでもいいので、先生のお仕事というような形でもいいので何か言っていただけると、ああ、そうなんだということ。とにかく知らないことが多過ぎると思いますので、ぜひともまた違う形で。アシスタントというのだって、全く皆さん、知りませんし。

○館政策推進部長 その辺の事業のPRはどんどんしていくようにします。

○松崎教育委員 もっともっとしていただければと思います。

○館政策推進部長 市長もいろんな場面では、それは言うてはいただいていますね。市と

しての広報とかそういうところでの取り上げ方とか、そういうのはあってもいいかわから
んですね。なかなか教育委員会では言いにくいかもわからないですね。

○葛西教育長 来年度、アシスタント、それから部活動協力員、これらがもっと大きな規
模で、四日市としては目玉として実施していくわけですから、その事業の中身を紹介する
ことによって、要は、アシスタントの方であれば、こんなことをしていただいていますと。
これが今まで教員の業務でしたと。それを先生方が教育に専念するために、こういうアシ
スタントをつけています。部活動についても、協力員も先生方がこういうときに働いても
らっていますという、そういう事業のPRをするということが、教員の多忙、非常に忙し
い、いろんな面がある、それを市としてカバーしていくんだと、一石二鳥になるんじゃない
かなというようなことを思いますので、そこはしっかり取り上げてやっていきたいと思
います。

○加藤教育委員 全体にかかわることなんですけれども、少し前に原案を教育委員会議の
一場面で見せていただいて、そのときも申し上げたんですけど、新しいプログラムにして
も、四日市プロジェクトにしても、これを大きな2本の柱として、これからの四日市をつ
くっていく教育をやっていくよという、そういう大きな方針のようなものがこの上にかぶ
さっておると。

一方で、渡邊委員もおっしゃいましたけど、環境整備という部分と、子どもたちのこれ
からのつきたい力という部分の2つが2本立てでこのプログラムが世に出ていく、市民に
示されていくということは、学校の先生方にとっても非常にわかりやすいので、教育の環
境整備として、今回は先生方の負担軽減、時間外軽減に向けてしっかり取り組みます。ま
た、これからの子どもたちはこんな方針で、こんな姿を描きながら、教育をお願いします
という部分の2本立てができますので、ぜひ、これ2つをつなげるようなものがこの上に
1枚来て、この2本の柱が出てくると、アピール度が違うかなと思います。前にも申し上
げて、どこまで事務局があと応えていただけるかです。

○館政策推進部長 今、案的なものがあります。

○加藤教育委員 ありがとうございます。

○館政策推進部長 この前、教育委員会でおっしゃっていただいていたんですね。それも
あって、教育委員会で少し、そのご趣旨を踏まえると、このような、先生のおっしゃるよ
うな2つの大きな柱があつて。

○加藤教育委員 こんなプロジェクトってないですもんね。両輪できた、車の両輪のよう

に示されたというのは。これ、すごいことやと思います。

○館政策推進部長 あと、これに環境の整備みたいなのが下支えするというふうな流れで、推進計画、ハードをね。

○葛西教育長 空調、それから給食もありますからね。そういう環境を整備していくということ。

○加藤教育委員 教員研修もそれにのっかって、今の校長の対話もそうですけど、そんなノウハウも示していただくような機会もぜひやっていただく。

○館政策推進部長 全体をまとめるようなところの表現として、これを1つのたたき台にさせていただいて。

○加藤教育委員 私はすかっとなります。

○館政策推進部長 ありがとうございます。整理できるとお思いますので。

時間が参りました。市長、何かありますか。

○森市長 教員するなら四日市プロジェクトの今の取り組みって、来年度以降、大規模展開していく可能性があるのですが、検証してもらいたいのが、良いと言っている人は別にいいんですけど、例えば業務アシスタントに依頼していない人とかいるじゃないですか。これ、何でしてへんのかとか。あと、クラブなんかも、助かっていると言いながら、時間外労働時間が減っていないと答えている人も一部いるわけですよ、この率を見ると。

だから、その辺、どういうふうな思いがあるのかなとか、持ち帰り、仕事時間が減っていないと言っている人が、助かっていないという人も多い。その辺の課題を分析してもらって、よりいいものにしていきたい。まだですけどね。

○加藤教育委員 5、6、7とやっとなら、二月か三月の結果ですもんで、もうちょっと具体的な……。

○森市長 だから、大半がいいからいいやじゃなくて、この辺の。これ、無記名でやって。

○館政策推進部長 どうですか。

○廣瀬教育監 使いこなせていない1つは、業務を依頼するには準備をしていないといけないので、それまでに準備、間に合わんと、いつも夜する……。

○森市長 自分でやってしまう。

○廣瀬教育監 習慣がついている人が、なかなか仕事の進め方が変わっていない人は頼めない。それから、大規模校やと、自分の個別のやつは遠慮してしまうというのはございます。もともと教員は、あいた時間があると違うことをしますんで、もっとええ授業をしよ

うと思って、その辺が、先ほど妹尾先生言われたように、限られた時間でどうするかということになかなかシフトできないところが今後の課題かなと思っています。

○館政策推進部長 このアンケートはもうやらないんですか。まだやるんですね。

○廣瀬教育監 やっていきます。ずっと継続して毎月調査して。

○森市長 これは無記名でやっているんですか。

○海戸田学校教育課長 無記名です。

○森市長 わからないか。

○廣瀬教育監 大体わかりますけどね、働き方を見ておったら、校長先生は。

○森市長 このぐらいの割合の人はね。大半があれなのであれですけど。

○加藤教育委員 多忙感を持っておらん教員もおりますので。個人差がある。

○館政策推進部長 今後のアンケートで、若干、その辺の視点で分析も少し踏まえてもらうということですね。

時間も押してまいりましたが、一応これで今日予定させていただいた項目はご議論いただけたと思います。ありがとうございました。より充実したものにしていけるとと思いますので、次回のところでまたご議論していただければと思います。

5 その他

○館政策推進部長 何かそのほかにございますか。今日の議題以外で何か。よろしいでしょうか。

それでは、今日はこれで終わらせていただきますが、次回はまたいつも秋ごろ、来年度の予算を立てる前には一応ご議論させていただいて、予算化に向けていきたいと思っていますので、ぜひお願いいたします。日程については、また後日、事務局が調整をさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

午後 2時45分 閉会